

〔倭名類聚抄十一〕艇附游艇 唐韻云、艇楊氏漢語抄云、艇、乎。小船也、釋名云、一二人所乘也、

〔類聚名義抄三〕艇音艇 游艇ハシフ子 舫音放、フ子、フナ、ハタ、艘音騷、船、數、 舩音チ

〔伊呂波字類抄波〕游艇ハシフ子 舫同 舩同

〔和玉篇舟〕艇ハシフ子 舫同

〔倭訓栞中編十九〕はしぶね 日本紀に同船をよめるは、同は舩也、和名抄には遊艇をよめり、はし

は、梯の義也、よて西土の俗稱に、杉板三脚艇などいへりとぞ、新撰字鏡には舩艇をよめり、

〔日本書紀三〕其年神武 甲 十月辛酉天皇親帥諸皇子舟師東征、至速吸之門、時有一漁人乘艇而至、

〔續日本後紀五〕承和三年七月壬辰、勅符副使小野朝臣篁、得今月八日飛驒奏狀、知歸著肥前國松

浦郡別島也、近聞第一第四兩隻船、半路漂廻、疾壞未弭、尋省茲奏、轉以驚嗟、本謂忠貞、必蒙利往、不知

此行、何負幽明、雖无巨災、艱虞足患、今案來奏、船船有損、艇亦失、還太宰府、繕補其不完、不足者、然後

與持節使等、共果國命、

〔小右記〕寛仁元年十月十二日丁丑、大殿御車尻道綱卿余乘也、攝政車尻齊信卿乘之、辰刻許、被參桂

山庄、到大井、傍河南行、於贄殿邊乘船屋形船二艘、其外有橋船、

〔枕草子十二〕とまりたる所にて、舟ごとく火ともしたる、おかしう見ゆ、はし舟とつけて、いみじう

ぢいさきにのりて、ごぎありくつとめてなどいとあはれなり、

〔宇治拾遺物語十四〕これも今は昔、筑紫に大夫さだまげと申者ありけり、中淀にて船にのりけ

るほどに、略中はし舟にてあきなひする者共より來て、略下

〔長門本平家物語十〕去る程に熊谷が使の船もちかづきて、五たんばかりにぞゆらへたる、新中

納言殿の給ひけるは、いかなるはんくわい張良が乗たりとも、か程の小船に何事のあるべきぞ、